『京童』にみる中川喜雲の名所観

長谷川　奨　悟

Ⅰ．はじめに

せめて古郷のつとに。見ぬ京物語はほいあらじ。仁和寺の法師ひとり石清水にまうでつる事あやしく。今少年のさかしきにあなひさせて。九重の外まで見めぐり。鳳闕のめでたつくり。寺社仏閣のかたちをゑかき。来歴をしるしてよといへは。（中略）より て此草藁を京童と名づく。文章のをろかなるは渠が年に罪をゆづり。事のあやまるは予が僻耳のなす穴かしこからぬにゆるされをかふむらむ。[1]

この一文は明暦四年（一六五八）刊行の中川喜雲『京童』（六巻六冊）に示された序文の後半部分である。ここには作者の生い立ちと重なる主人公が、郷里での土産話のために賢そうな少年（京童）に案内をさせながら京見物をおこなっていくもので、京見物をめぐる語りはこの少年によるものであるという本書の設定が示されている。そこで読者は、喜雲が選定した京周辺における物見遊山で訪れるべき場所、そこで見るべき景物（標題としてとあげられる計八七ヶ所の場所）について、童（案内者）の語り（解説）を通じて、由緒来歴をはじめとする「場所の物語」や当時の注目すべき様相によって見出され、価値付けされた場所を巡り、主人公の物見遊山を追体験していくことだろう。

『京童』は少なくとも四つの版が確認されるなど、実に多くの読者を獲得していたとされる[2]（市古一九七六）。本書は、卓上でのバーチャルな旅ができる読み物として読まれたほか、寛文四年（一六六四）に石出常軒が京に滞在した際の物見遊山に本書が用いられた可能性を中村（二〇〇四）が指摘したほか、神崎（二〇〇四）や原（二〇一三）などに言及される当該時期の行動文化の中で実用的に利用されていた形跡が確認できる。

市古（二〇一〇）や藤川（二〇一〇）などの論攷で指摘されるように、当時の出版活動における版権問題などを背景に、名所地誌本を新たに刊行しようとする書肆のもとには、既存の版本と多

くの地理的知識の蓄積があったものと推測できる。[3] この種の編纂・刊行の営為では、新たな編纂を試みた知識人たちは、過去の名所地誌本の内容をふまえるような慣例があったとみられ、既存の知識をベースに新たに見出した場所を名所として位置付けるような形跡が窺える（拙稿二〇一二）。ことに、山近（一九九九）や菅井（一九九九）らが整理した京を対象とする近世名所地誌本をめぐる系譜論からみれば、『京童』は黎明期のなかで最も早くに成立し、後続する地誌本への大きな影響力を確認できる（拙稿二〇一二）。その挿絵における図像表現は、例えば、群馬県立歴史博物館・米沢市立上杉博物館・林原美術館（二〇一一）に紹介されるに、洛中洛外図屏風「歴博E本」のような近世都市風俗図への図像転用が確認できるほか、後世の江戸を中心に盛んに作製された「名所絵」にも影響を及ぼしたという（赤井一九九四）。

上杉（二〇〇四）は、一九七〇年代後半から九〇年代にかけて江戸における名所と名所観をめぐる議論を総括し、歴史的・文化的背景が異なる上方には当てはまらない部分も多いことを指摘した。そして、十七世紀の大坂の名所に対する分析を通じて、中世とは異なる近世初期の名所観が時代の画期にみられる、ある程度普遍的な傾向である可能性を見出すとともに、近世初期の名所観の重要性を見いだしている。しかし、それ以降も当該時期の京における議論がほとんどみられないことから、中川喜雲の『京童』と続編にあたる『京童跡追』の編纂実践を事例として、ここにとりあげられる場所や景物（非名所？）の特徴を明らかにし、彼の名所観を考察することで、近世初期の名所観の形成に関する議論の俎上に乗せること本稿の目的としたい。

Ⅱ．名所観の成立・発展と名所めぐる知的実践

「名所」とは、万葉集以来、和歌に詠まれる歌枕としての「名所（ナドコロ）」が原意とされる。近世日本において「名所」なる場所や風景をとりまとめ、不特定多数の読者に伝える媒体としての役割を担ったのが名所地誌本や風景を描く浮世絵であった。これらは高い教養と歴史地理的なまなざしを有した知識人層による編纂（制作）／刊行の実践によるもので、商品流通を通じて庶民（一般読者）に名所をめぐる認識を流布・定着させる役割を担った彼／彼女らにとって、見出した場所を「名所」と価値付けるうえで、古歌の有無は最も意識されるべきものであったといえる[4]（拙稿二〇一八）。本章では、近世に至るまでの名所観の形成と近世における変遷をめぐる概念的整理をおこないたい。

（一）歌枕における名所観の成立

古代日本における歌枕としての「ナドコロ」の発生・成立と変遷・固定化をめぐっては、『風土記』などにみられる神話伝説への解釈と名所をめぐる心象性の関係を指摘した鶴見（一九四〇）や、平安時代の和歌における「歌枕」の位置づけとその変遷を辿

った高橋（一九六六）、歌枕における地名の固定化の背景に、風土性と美的選択の関係を論じた佐々木（一九七九）などがある。北住（一九七一）は、下向する官人たちによって和歌の素材化が進んだこと、貴族たちによって操作された「風景観」であったと指摘する。これらの研究成果を整理すると、古代を通じて形成され、中世初頭に成立する『能因歌枕』[5]や『大鏡』などにみられる歌枕としての名所とは、和歌において固定化された一つの〈型〉として重要な役割を担うものであり、必ずしも実景を伴わない、知的抽象概念としての場所認識であったという。これらは後世の行動文化の中でみられるような実体を伴うものではなく、その多くは唯美を希求した読み手の心境のなかに形成された心象風景であった可能性が高い。また、鴨長明『無明抄』（一二一一頃）の「名所をとる様」[6]にあるように、古歌にしたがって和歌を詠むべき場所が名所であると捉えられるようになっていたようである。

平澤（二〇〇〇）は、『廻国雑記』（一四八七）を精査し、十五世紀末の名所観について、次のように示唆している。地名としての「ナドコロ」から、この過程において著者道興が和歌に詠まれる名所を示す「聞こえたる所」、あるいは「名に聞し」とは明確に区別し、その場所の固有性を指すものとして表現した「名にしおふ所」にみえる場所、あるいは風景認識へと変容したのだという。これら中世の名所観の特徴としては、その多くが和歌や紀行文に示される読み手（書き手）の〈自己完結型〉の場所や風景へのまなざしによるものであったといえよう。

（二）近世における名所観の変遷

一九七〇年代後半から九〇年代にかけて江戸を分析対象として、近世における名所の在り方や名所をめぐるまなざしといえる名所観の成立とその発展に関して議論が盛んに展開された。これらの多くは、近世の都市発展史や行動文化との関連のなかで、当該時期の時代性とその特徴について、名所を素材に導き出そうとしたものであった。この時期の総括的な成果といえるのが、鈴木章生『江戸の名所と都市文化』（鈴木二〇〇一）および、その後の上杉（二〇〇四）の論攷であろう。前者は、近世における名所の総括とすべく、近世名所について「訪れる対象が名所であり、常に変化するもの」であると定義してみせた。これを承けて後者は、行動文化に傾倒しない視点が重要であるとし、十七世紀の大坂にみられる名所観を検証を通じて、新興都市である江戸と歴史的背景や文化的背景が大きく異なる上方における名所や名所観とは異なる可能性を見出している。そして、当該時期に刊行された名所案内記にみえる名所観について、「名所」とは、「歌名所」と「俗名所」に分類されること。これを時期区分でみると過去に対するまなざしによって構成される「過去名所」と、現在の様相からなる「現在名所」の二つが存在すると指摘している（上杉二〇〇四）。この行動文化に傾倒することなく整理した名所をめぐる捉え方は、名所が構成される諸要素を本質的に捉えたものと評価できる。その一方で、例えば、青柳（二〇〇二）や原（二〇一三）などの議論にみられるように、多くの人々が遊山のなかで著

名な名所とされる場所を巡ったり、文学作品の中に取り込まれていたのは周知の事実である。この点で言えば、当該時期の行動文化という視点を欠いては、「名所」をめぐるまなざしや、その価値付け、それらをとりまく重層的な諸コンテクストとの関わりをとらえきれないのも事実であった。

鶴見（一九四〇）は、これらの議論が見られる以前に、近世における名所観を概観し、日本人は常に名所そのものの実質現姿ではなく、主として過去の歴史的追憶の方向に向かっていたといい、過去における名所は歴史的、かつ人文的な要素が貴ばれるのであって、名所の現在の実際的価値はあまり問題となっていなかったことを示唆している。この過去に意欲的に向き合う姿勢は、上杉（二〇〇九）らが解説する近世における歴史地理的なまなざしをともなう場所認識と、その実践について検討するうえで有益な指摘といえる。また、米家（二〇〇五）は、過去遡及的なまなざしをもつ近世地誌のあり方について、官選地誌、民間地誌においても共有する性格であり、その中心には名所や旧跡、歴史的な墳墓や寺社といった「過去」を想起される景観であったという。実際に作品の凡例や序文をみれば、彼らは編纂にあたって、そこに住まう人々に伝承される地域や家の過去、その民俗誌（＝その土地の生活の歴史）を現地見聞と聞き取りによって精力的に収集するほか、旧記による考証を試みるなど、場所の「過去」をめぐる実証主義的な調査姿勢が読み取れる（拙稿二〇〇九）。

（三）小括

このように貴族や僧侶、当時の知識人たちが見いだし受け継がれてきた名所観は、近世の出版文化の成熟や行動文化の発展を社会的背景に、和歌や紀行文から名所案内記などの刊行媒体へ移り、民衆一般の名所へと変容していく。近世において名所の媒体が和歌から名所地誌本へと移りゆく一方で、『内裏名所百首』や『類字名所和歌集』といった歌枕集が継続的に編纂／改版されているほか、元禄期の契沖による名所研究のように和歌学としての伝統的な知識の普及は、近世を通じて確実に継承され続けている。このように近世以降には、和歌学における本来の名所をめぐる視点。そこから変化分流し、興隆していった新しい価値観に基づいて様々にまなざされ、訪れる対象としての新しい名所をめぐる視点という二つの路線があったことが指摘できる。

知識人層による実践はその場所を訪れた際の見どころや、伝説・説話の舞台など、その場所の持つ歴史、現在の著名な産業や風俗といった多様な情報を発信し、相対としての都市／場所イメージを再生産している。しかし例えば名所地誌本を編纂する際に、どの地域の何をどの程度取りあげるのかといった領域性は様々に異なり、その背景には編纂者や版元の編纂意図のほか、幕藩領主など依頼者の意向など、編纂者の立ち位置や地理思想、彼らをとりまく種々の社会的環境が複雑な影響下で決定されるため、みな一様に同じでもない（拙稿二〇一九）。

そこで筆者は、近世における「名所」とは、場所や景物がある

時点で、誰かに特定の場所認識やまなざしによってその価値が見出されることで生産（再生産）された、あるいは差別化された「場所イメージ」であること。それらは名所地誌本といったメディアや、そこに重層的に関わりをもつ地域社会（ホスト）を通じて、旅行者など（ゲスト）に対して、その場所や景物への見方を規定する「フレーム」の役割を担った文化的装置であると定義しておきたい。またそれゆえに、強い地域性をもち、情勢の変化によってそこへの価値付けや認識が変化し（広く一般化し定着し）うる流動的な側面をもっている。このとき、編纂者の場所へのまなざしは、地域外から対象をみる「他所／他者のまなざし」、地域内部から対象をみる「自所／内部のまなざし」、ないしその両方を併せ持っているといえる（拙稿二〇一八）。

この点において名所をめぐる問題、ことに近世知識人層の名所観やそれらを公表する知的実践を考察するには、地理学において議論されてきた「場所」をめぐる地域性や差異、つまり、名所とされる場所や景物へのまなざしには、その地域で生成されてきた風土や文化といった諸コンテクストが大きく関与している。さらに、編者（制作者）の生い立ちのなかでの経験や、彼らの人脈といった「知」をめぐるネットワーク、培われた知識や教養の所在（根拠）などの個人的要素が、作品中に垣間見られることから、これらの要素もまた極めて重要な鍵であるといえる。

Ⅲ．中川喜雲とその作品群

（一）中川喜雲の人物象とその思想

中川喜雲については、松田（一九五八）や野間（一九六七）、市古（一九七九・一九九三）など国文学の視座から彼の生い立ちや人物像、医師／俳諧師として活動に注目されてきた。これらの成果によると、彼は丹波国桑田郡馬路村（現：京都府亀岡市）出身で、通称を吉左衛門、名は吉治といい、京にのぼり薙髪の後に喜雲、山櫻子と号し、医者を本業としながら、俳諧師、名所記や草子の作家として知られた人物である。その著作には、家譜や経歴、教養の系譜を知りえる懐述が散見される。彼は、牢人であった父中川仁右衛門重定とともに、比較的仕官の途が開かれていた医学を修得すべく京に出てきたという。[7] しかし、彼は医者として仕官ができたわけではなく、当初の目論みは達成できなかった（野間一九六七）。その一方で喜雲は、明暦四年（一六五七）の『京童』を皮切りに四つの著書を刊行し、作家として世に知られるようになる。その要因には、医者として功をなすことをあきらめたゆえであるという（市古一九七九）。『京童』巻六の「嵐山」や『私可多咄』の巻二にみえる懐述によれば、彼の先祖は、細川政元の家臣で嵐山城主の香西又六であったとされる。喜雲はこの出自を強く意識していたといい、彼の文学活動および精神構造を考える際にあたって、重要な意味を持つという（松田一九五八）。

喜雲の著作にみられる「懐旧的」かつ「自嘲気味」の感慨は、華やかしい先祖と自己の零落した境遇に主たる要因があるとされる（市古一九九三）。

俳諧師としての喜雲は、松永貞徳の直門で、令徳、重頼など貞徳門古参の俳人にもつき、明暦三年前後より貞室に傾倒していく。年代が判明する彼の作例は、寛永九年（一六四二）の歳旦発句を初見とし、寛文十一年（一六七一）の歳旦発句が最後とみられ、これ以降は俳諧集に入集されるも、俳諧世界から遠ざかったとされる。広島への田舎わたらいに加え、傾倒する貞室が寛文十三年に死去したことに要因があるという（松田一九五八）。

彼がわたった近世初期の広島藩浅野家は、儒学者や医学者が多く登用され、厚遇された好学・文雅風流も盛んな家風であった（拙稿二〇〇九）。さらに広島では俳諧も盛んだったようで、当該時期に刊行された俳諧集から、寛文七年頃には「広島の喜雲」として俳壇に知られるようになる。ただし彼は、広島に定住せずに京とを往復し、その一環で九州方面に「舌耕」のために何度も出かけていたという（市古一九七九）。喜雲の京都時代をみていくと、『私可多咄』で詠まれる「夕くれの武士せし時もくらしかね日の出医者とて夜はあけぬ也」という狂歌同様に、医者ではあっても仕官できず楽な生活ではなく、年齢も三〇歳を越えていたという。喜雲の心情は懐旧的かつ自嘲気味であり、先行きに望みも持てない状況において作家として活躍するに至ったものと整理できる。このような姿は、本稿の冒頭で述べたように、『京童』の序文にみえるさえない主人公の表現も、彼自身を投影した喜雲の自嘲性の表れといえよう。

また、『京童』など彼の著作中には、『源氏物語』や『伊勢物語』や、中国の故事の引用やそれに関する言及が散見される。これに加え、松永貞徳の『なぐさみぐさ』の転用（上杉二〇一五）や、林羅山の『野槌』の影響を受けるなど、吉田兼好の『徒然草』の世界観に影響を受けているという（神谷一九九九）。ことに古典文学に関する知識には、近衛尚嗣[8]らと交流があった徳昌庵法眼慶雲の影響がみられる（市古一九七九）。喜雲の医学や俳諧における師弟関係をみれば、師を介して当時の文化人たちの知的ネットワークに関わり、その周辺で活動していくなかで教養人として必要な様々な知識を蓄積していった可能性も考えられよう。

（二）喜雲の作品群の特徴

次に、中川喜雲による作品群とその特徴を整理していく。

『京童』（六巻六冊）は、明暦四年に刊行された仮名草子で最初の名所記とされ、①山森六兵衛版、②八文字屋五兵衛版（二種類）、③平野屋佐兵衛版の三版四種類が確認されている[9]。野間（一九六七）は本書を、「洛中洛外の寺社・名所・旧蹟の由来・縁起・伝説を記し、毎条絵を挿みまた古歌を引き、自作の狂歌・発句・長歌・廻文歌などを添えて、実益と共に興味ある読みものに仕立てている」と評価している。そして、①序文を供えていること、②巻末に天下太平を寿ぐ文辞があること、③ある程度の実用

性をそなえた地誌的傾向がつよいことの三点から、当初より不特定多数の読者を前提とした著述／刊行であったと指摘している。

二作目の『鎌倉物語』（五巻五冊）は、万治二年（一六五七）七月に京の書肆から刊行された鎌倉をめぐる名所記である。[10] 本書の自序と末尾をみると、実際の物見遊山の手助けではなく、仮名草子として書画を読み進めていくことで、卓上で鎌倉逍遙が楽しめるものを意識したことがわかる。その構成は、以前に江戸に下ったおりに書き留めた紀行「道草」における鎌倉部分を骨子としつつ、『東鏡』など鎌倉所縁の文献の引用によって肉付けされるかたちで話題は整理され、話の流れが脱線する「雑然性」がみられる前作と大きく異なる。これは、京からの物理的な距離間からくる場所感覚の違いにあるという（市古一九七九）。

三作目の『私可多咄』（五巻五冊）は、『鎌倉物語』刊行の約二ヶ月後に京の書肆秋田屋平左衛門から刊行されたほか、寛文十一年に江戸の鱗形屋からも出版された咄本である。本作には喜雲の出自について言及する場面や、旅の用心などを述べるなど、ここでも一種の雑然性が持ち味となっている（松田一九五八）。

四作目の『案内者』（六巻六冊）は、秋田屋平左衛門から刊行された年中行事記である。本作では、内裏の年中行事を描く場面には、『公事根源』、『年中行事哥合』などの文献が利用されている一方で、旧記にはない民間の年中行事への言及が見られるなど、オリジナルな視点がみられるという（市古一九七九）。

最後に『京童跡追』（六巻六冊）は、寛文七年（一六六七）に八文字屋五兵衛より出版された名所記である。本書の外題には、「京童あとをひ」、「京童後編迹をひ」、「京童後撰跡を飛」などがみられる（野間一九六七）。喜雲は『京童』が刊行されたごく早い段階で、前作を補うための続編刊行の準備を進めていたといい、翌万治二年頃には初稿が整っていたことが『京童跡追』の序文から確認できる。しかし、広島への田舎わたらいをしたため未刊のままであったが、広島において刊行を進められ、書肆からの依頼もあって、この旧稿を骨子として巻六に「厳島」を加えるなどの修正がなされて出版に至っている（野間一九六七）。

中川喜雲の著作には、彼の「懐旧的」かつ「自嘲気味」の感慨が共通して存在する。喜雲の著述姿勢は保守的で、逃避的安易さにあったとしても、時折示す懐疑的な諧謔（仏教界にむける批判）があり、著者自身について自嘲的に語っている点に特徴があり、こそには「文芸的実用性」（爽雑性）と「地誌的実用性」の二つの側面があるという（松田一九五八）。初期の名所記や咄本では、彼の特徴である叙述の逸脱、俳諧や狂歌、彼自身の感慨など、実用的な地誌には不要である爽雑性が多分に織り込まれている。仮名草子である名所記としてみれば「文芸的実用性」が必要だったのであり、彼にとっての「文芸」とは、俳諧や狂歌、種々の雑学がそれにあたる。この俳諧を除いては成立し得ず、上記にこそ「読物」としての面白さの要因があったとされる。ただし、田舎わたらい以降は、これまでのような諸特徴はみられなくなる。その背景には、雑多性や不純性から脱却し、整理整頓された

名所案内として出版するのが望ましいという、出版界の動向と出版姿勢の変化があったという（市古一九七九）。

Ⅳ．『京童』と『京童跡追』に取りあげられる場所や景物

（一）分析の視点とその方法

『京童』（山森版）には、巻一に「京わらへ　一　たいりよりたつみの方の名所」とあるように、各巻の題簽に巻数を記し、各巻所載の名所方位の割注がみえるものが存在する（野間一九六七）。各巻の目録にあげられる場所や景物は、巻一の冒頭の「内裏」（御所）を中心に各方位を単位として空間的にまとめられた計八七か所を確認できる。また、『京童跡追』では、前作にみられない京周辺の場所や景物がとりあげられるほか、摂津国・大和国（奈良周辺）、そして厳島を加えた計六八か所を確認できる。喜雲は著作において『源氏物語』や『伊勢物語』といった文学、中国の故事を意識しているほか、松永貞徳の『なぐさみぐさ』の転用（上杉二〇一五）や、林羅山の『野槌』など、吉田兼好の『徒然草』の世界観に影響を受けていることは先述の通りである（神谷一九九九）。この点に留意しつつ、『京童』、『京童跡追』について、以下に示す五つの分析視点から考察をおこなう。

一つ目の分析視点として、喜雲が京見物での見どころとして取りあげ、解説・叙述した理由（注目すべき事象や、伝承する場所の物語など）について検討する。その手がかりとして、各場所における本文叙述中で語られる内容の比重と、挿絵に描かれる図像構成に着目し、（A）寺社仏閣の由緒のほか、著名な僧や神官に関するものなど、宗教的な要素に重きが置かれている「寺社／宗教」。（B）近世初期には古跡として認識されていた場所や、その記述に重きが置かれている「古跡」。（C）京の風俗に関するもの。大店や出店などの産業、茶畑や西陣といった生業に関する記述に重きが置かれている「風俗／生業」。（D）祭礼や年中行事が行われる場所や、その事柄に関する記述に重きが置かれた「祭礼／行事」。（E）その場所の地勢や概説に重きが置かれている「地理／景観」、（F）上記に分類できない場所や景物を「その他」とする6つのカテゴリーに分類し、その特徴を整理していく。

二つ目の分析視点として、喜雲の中世以来の名所観の影響を考えるため、本文叙述や挿絵に添えられる古歌、漢詩、俳諧などを整理し、歌枕としての名所を、どの程度意識していたのかについて検討する。また、上杉（二〇〇四）による十七世紀の大坂の名所観の特徴を意識しつつ、喜雲がとりあげる場所は、過去の物語に重きを置く「過去名所」なのか、現在の様相が重視される「現在名所」なのかという点からもその特徴を検討する。

三つめの分析視点として、喜雲がとりあげられる場所の空間分布の特徴と地域性に関する考察をおこなう。この点について、市古（一九七九）は、『京童』の序文[11]に着目し、喜雲は未知の読者

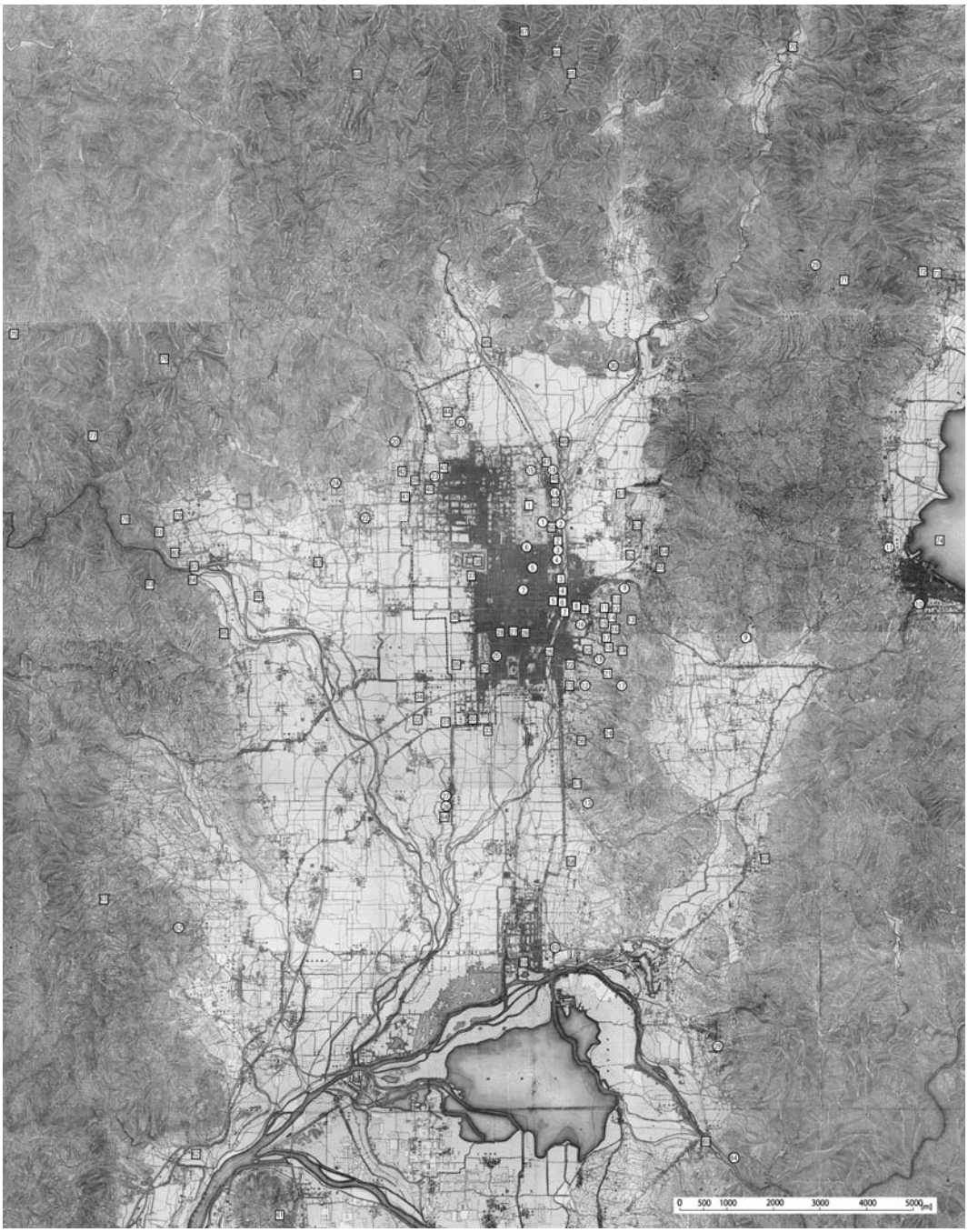

図１　『京童』、『京童跡追』に標題としてとりあげられる場所や景物

注）明治 22 年測量２万分の１地形図京都北部、京都南部、嵯峨、大原野、淀、山崎をベースとして、『京童』にあげられる場所を□、『京童跡追』のものを○で示した。各番号は、表１、表３にそれぞれ対応している。

に対して名所案内をなすために自ら調査・見聞し、そこで得られた知見を踏まえて本書が執筆されたことを指摘しており、前稿（二〇〇九）の黒川道祐による地誌編纂実践の事例などを考慮すると、作中には著者の「地域観」[12]ともいえる地域的特徴が見られる可能性が高い。そこで、とりあげられる場所や景物について、明治期の旧版地形図を用いて現地比定をおこなった（図一）。

四つ目の分析視点は、『京童』『京童跡追』に掲載された挿絵に着目し、そこに描かれる図像やその構図に対する考察をおこなう。ことに、『京童』における挿絵の描写は、古田（二〇〇〇）によれば本文に逸脱することなく「雅」に物語り、本文には記さない「俗」の事柄を挿絵のうちにほのめかし、雅と俗の微妙な関係のうちに各名所のたたずまいを描くという趣向がみられること。それらは名所を単なる物見遊山の対象として平板化せず、重層的な物語の構築が見て取れ、それを本文と挿絵とで表現しようする試みであったという。本稿では、この指摘や近世後期の「名所図会」資料の図像分析から得られた知見（拙稿二〇一二・二〇一九）をふまえつつ、描かれる図像とその構図の特徴を整理、本文叙述との関係性について検討していく。

五つ目の分析視点からみえてくる特徴から、喜雲の場所認識の一端と案内記の編纂姿勢についてを次章で検討する。加えて、これまで京における名所地誌本の嚆矢としてほぼ無批判に位置づけられてきた『京童』は、当初から名所を案内する「名所案内記」として成立したのかという、本書の位置づけを再検討する。

（二）『京童』の場所や景物

『京童』の目録にあげられる場所や景物は、巻一冒頭の「内裏」から巻六の「太秦」に至るまで、京都盆地内から琵琶湖西南までの八七か所を確認できる（図一）。千葉（二〇〇七）は、本書巻首の「内裏」について、喜雲が京を見回す起点と位置付けるもので、彼の都市へのまなざしが示されているという。そして、巻一が巻首の内裏を中心とする左京を、巻二が巻末の二条城を中心とする右京に概ね対応し、第二定型洛中洛外図屏風に描かれる都市構造と一致することを指摘し、『京童』の構成は、洛中洛外図屏風などの都市図に影響を受けた可能性を示唆している。これは、近世都市風俗図と名所記との親近性や、これらが相互に影響関係を持っていたことを物語っている。また、喜雲は自身が属した知的ネットワークのなかにあって、いずれかの場所でこれらを鑑賞する機会を得ていたことを覗わせるものである。

前節で述べた分析視点（一）から（四）について整理、一覧化したものが表一である。まず、本文叙述における注目点や由緒性でみれば、（A）「寺社／宗教」が計五九か所（全体の約六八％）と最も多い。次いで、（B）「古跡」が計十五か所（約十七％）、（E）「地理／景観」は計七か所（約八％）、（C）「風俗／生業」および（F）「その他」が各三か所（約三％）となり、（D）「祭礼／行事」への関心に重きを置くものは確認できない。これは、

表１ 『京童』に標題としてあげられる場所や景物の一覧

巻	ID	名称	分類	過去	古歌	現在	挿絵
1	1	内裏	F	○			E
	2	下御霊	A	○		○	A
	3	誓願寺	A	○		○	A
	4	和泉式部	B	○	○		B
	5	腹帯の地蔵	A	○	○		A
	6	たこやくし	A	○			A
	7	四条河原	C			○	C
	8	目やみの地蔵	A	○			A
	9	祇園	A	○	○	○	A
	10	ちおん院	A	○			A
	11	円山	A		○	○	A
	12	長楽寺	A	○			A
	13	将軍塚	B	○			B
	14	双林寺	A	○			A
	15	八坂	A	○			A
	16	霊山	A	○			A
	17	さんねん坂	E				E
	18	泰産寺	A	○		○	A
2	19	清水寺	A	○	○		A
	20	六はら	A	○		○	A
	21	豊国	B			○	B
	22	大仏	A	○			A
	23	三十三げん	A	○		○	D
	24	泉涌寺	A	○			A
	25	御影堂	A	○		○	C
	26	いなばやくし	A	○			A
	27	新玉津島	A	○	○	○	E
	28	五条の天神	A			○	D
	29	本願寺	A				A
	30	東寺	A	○			D
	31	羅生門	B	○			E
	32	西寺のしゅんびん塚	B			○	E
	33	大通寺あま寺	A	○			A
	34	水屋くし	B	○			A
	35	傾城町	C	○		○	C
	36	壬生	A	○	○		D
	37	神泉苑	C	○			C
	38	二条の城	F			○	E
3	39	北野の天神	A	○	○		A
	40	西方寺	A	○		○	A
	41	紙屋川	E	○	○		E
	42	平野	A				A
	43	千本えんま堂	A	○			D
	44	今宮	A	○	○		C
3	45	上賀茂	A	○			D
	46	下鴨	A			○	D
	47	本満寺	A	○			D
	48	しんにょどう	A	○			A
	49	百万遍	A	○			A
	50	革堂	A	○			A
4	51	吉田	A	○	○		C
	52	白河	B	○			E
	53	新黒谷	A	○			A
	54	永観堂	A	○			A
	55	南禅寺	A				A
	56	東福寺	A	○		○	A
	57	稲荷	A	○		○	D
	58	藤の森	A	○	○		E
	59	伏見	E	○	○		C
	60	宇治	B	○	○	○	C
	61	八幡	A	○			A
	62	山崎	A	○			C
	63	大原（野）	B	○	○		C
	64	鳥羽の恋塚	B	○			B
5	65	くらま	A	○		○	C
	66	僧正谷	B	○			B
	67	貴布祢	A	○	○		A
	68	いわ屋	A	○		○	A
	69	醍醐	A	○			C
	70	大原	B	○	○		C
	71	ひえいの山	E	○	○		E
	72	鼠秀倉	B	○			C
	73	日吉	A				D
	74	水うみ	E				C
6	75	あたご	A	○	○		A
	76	高雄	A	○			A
	77	清滝	E	○	○		C
	78	小倉山	B	○	○		B
	79	釈迦堂	A	○	○		D
	80	天龍寺	A	○			A
	81	野の宮	F	○	○		C
	82	大井川	E	○	○		C
	83	嵐山	B	○	○		C
	84	法輪寺	A	○			C
	85	松尾	A	○	○		D
	86	梅宮	A	○	○		C
	87	太秦	A	○	○		C

注）表中の分類部分に示しているアルファベットについて、A とあるものは（A）「寺社／宗教」、B とするものは（B）「古跡」、C は（C）「風俗／生業」、D は（D）「祭礼／行事」、E は（E）「地理／景観」、F は（F）「その他」を示し、「過去」とは本文叙述における場所の過去への言及がみられるか否か、「古歌」とは古歌が示さているか否か、「現在」とはその場所の現在の様相に関する叙述がみられるか否かを示している。なお、以下の表についても同様である。

例えば寺社でおこなわれる祭礼行事であれば、まず寺社の縁起や場所の物語が示された後に、付則的な叙述はみられる場合もあるが、本文中では現在的な要素の強い祭礼行事への注目度は相対的にみれば低いといえる。

次に、古歌と場所の関係性については、本文叙述の最後に古歌や漢詩、狂歌などが添えられる場合と、叙述中に引用される二つのパターンがみられる。このうち、前者のように古歌が扱われる場所は、少なくとも計二五か所（六〇首）が確認できる。なかでも、喜雲の場所認識のなかに中世以来の名所観の存在を覗わせる名所和歌に注目すると、後者の場合を含めると計五〇首ほどになり、これらの和歌は総て『類字名所和歌集』に収録されているものであったという（市古一九九三）。このような古歌が見られる場所を分類すると、（A）「寺社／宗教」では十二か所（計二一首）、（B）「古跡」では七か所（計十六首）、（E）「地理／景観」では七か所（計二一首）、（F）「その他」が一か所（計二首）となる。ことに、（E）「地理／景観」と分類できる場所では多くの古歌が見られることから、和歌に由来する「歌名所」として注目された可能性が高い。地域性からみると「小倉山」など巻六の西山地域（嵯峨野地域）に所在する場所で多くの古歌が示されるなど、古代以来の京近郊の遊楽地として地域性が反映されているといえよう。また、自作の狂歌や俳句のほか、「和泉式部」や「円山」などでは、古歌に対する返句と思われるものも確認できる。貞徳門下の俳人あり教養人であった彼は、訪れたその場所場所で当然のようにこれらを意識したであろうし、歌を詠む営為は自己表現の重要な形であったと推測できる。この文芸的要素は、喜雲の執筆動機の一つであったという（市古一九九三）。

本文叙述の時期区分に着目すると、過去が叙述される場所が計七四か所、現在の様相への言及は計二〇か所、時期区分ができない場所が二か所確認できる。とりわけ、現在の様相への関心は、下京や東山山麓の地域に多くみられる一方で、西山地域には全くみられない。この対照的な傾向は、当該地域の性格を象徴しているかのようであり、当時の京の人々にとって異なったまなざしが向けられていた可能性を伺わせる点で興味深い。

また、本文叙述の内容は、話題の逸脱や複数の話題で推移するなど、場所に対する注目度から叙述の分量に相応のばらつきがみられる。これらは喜雲の著作群の特徴的な側面であり、文芸的な面白さの要因であった（松田一九五八）。ことに、（B）「古跡」に分類できる場所に多くみられ、伝承される過去に関する事柄を熱心に叙述する傾向がある。これは、日本人は常に名所そのものの実質現姿ではなく、過去の歴史的追憶の方向にあったという鶴見（一九四〇）の指摘とも概ね合致する。

次に、『京童』に掲載される挿絵について検討する。み本書と『京童跡追』では、標題にあげられる全ての場所に挿絵が添えられており、両書ともに共通の特徴がみられる。挿絵として描かれる図像の構図的特徴と、図像化される景物に対する作者（絵師）の視点の特徴は、以下の五つにまとめられる。

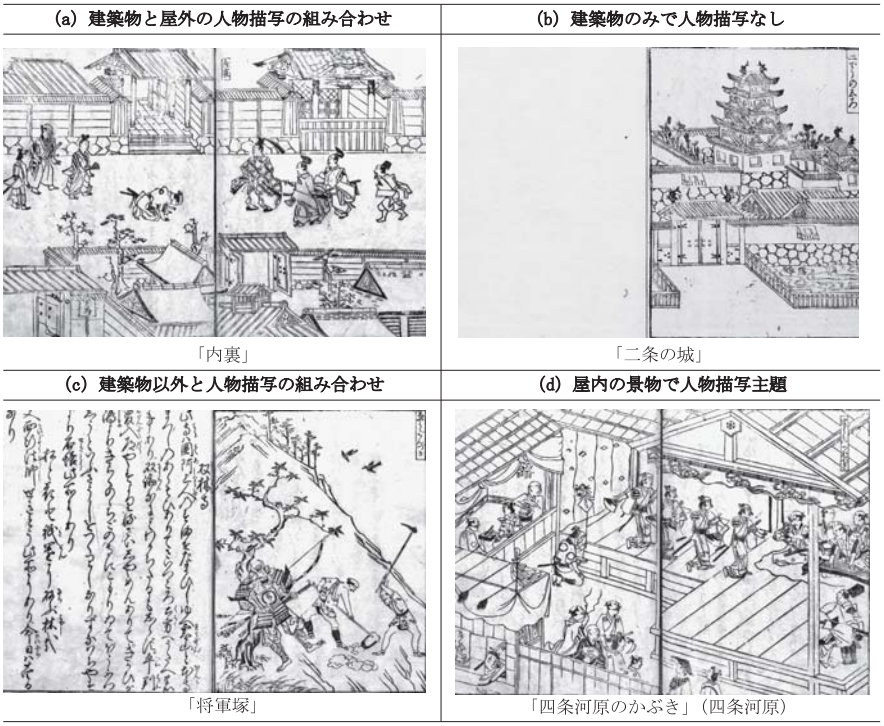

図２ 『京童』の挿絵における構図的特徴の４つのカテゴリー

出典）中川喜雲『京童』（国立公文書館デジタルアーカイブ）

（イ）構図的特徴は、以下の四つにカテゴリー化できる（図二）

（a）「内裏」など、建築物と屋外の人物描写の組合せにより成立しているもの。

（b）「二条の城」など、建築物の描写のみで成立し、人物描写がみられないもの。

（c）「将軍塚」など、建築物以外の描写と屋外の人物描写の組合せで成立するもの。また、「吉田」など建築物を背景とする人物描写主体の描写がみられるもの。

（d）「四条河原」の芸能とその鑑賞者の様子、また「永観堂」など、寺社の建物内に安置された本尊の姿と参拝者の様子などといった、屋内の景物を中心に表現しているもの。

（ロ）「僧正谷」（図三）など、その場所に伝承される著名な「過去」に対する可視化ともとれる景物の描写がみられる。

（ハ）現在の様相が描かれる景物は、寺社参詣や物見遊山をおこなう人々や、その場所で行われている生業の従事者など、貴賤や男女を問わず様々な姿を通じて京の風俗が描写されている。これらに対する作者の視点は、地上から少し高い場所に設定された視点からやや俯瞰的な近景描写がみられる。しかし、ここでの人物表現は、後の名所図会資料にみられるような空間スケールとしては、その役割を果たしていない（拙稿二〇一〇・二〇一九）。

（二）年中行事や祭礼など京の風俗描写では、馬淵（二〇一一）が指摘するように、洛中洛外図屏風など近世都市風俗図にみ

図3　『京童』に描かれる「僧正谷」
出典）国立公文書館デジタルアーカイブ

図4　『京童』に描かれる「こやすのとう」
出典）国立公文書館デジタルアーカイブ

られる集合的な都市風俗表現の一部を切り取り、定型化された図像モチーフの転用といえるような構図がみられる。

（ホ）寺社など宗教的な空間を描くものでは、「永観堂」などのように本尊などの尊像の姿と参拝者が主体的に描写されるほか、「泰産寺」（こやすのとう）の挿絵（図四）にみられる子授けの霊験譚など、尊像は描かれていなくとも、その信仰者などの描写により、その霊験譚や御利益などを視覚的かつ象徴的に表現する意図がみられる。この場合は先行図様の意味の転用と考えられる（馬淵二〇一一）。これらは、中世の寺社参詣曼荼羅や近世都市風俗図にみられる場所の視覚表象の一つといえる（長谷川・網島二〇一九）。

これらの特徴を持つ挿絵を対象に本文叙述と同様に分類すると、（A）「寺社／宗教」が計三七図（約四二％）、（B）「古跡」が計六図（約七％）、（C）「風俗／生業」が計二二図（約二五％）、（D）「祭礼／行事」が計十二図（約十一％）となり、（E）「地理／景観」が計十図（約十一％）となる。本文叙述の内容と挿絵に描かれる景物が異なる場所は、ほぼ半数の計四〇か所で確認できる（表二）。これらは、本文叙述の内容が（A）「寺社／宗教」と分類できる場所でこの傾向がみられる。例えば、巻二の「壬生」（壬生寺）（図五）の場合、本文叙述では地蔵菩薩（本尊）の霊験譚とそれをめぐる場所の物語に重きが置かれる一方で、挿絵では、壬生寺境内での大念仏狂言を見物する庶民の姿が描かれており、（D）「祭礼／行事」に分類できる。また、巻二の「千本

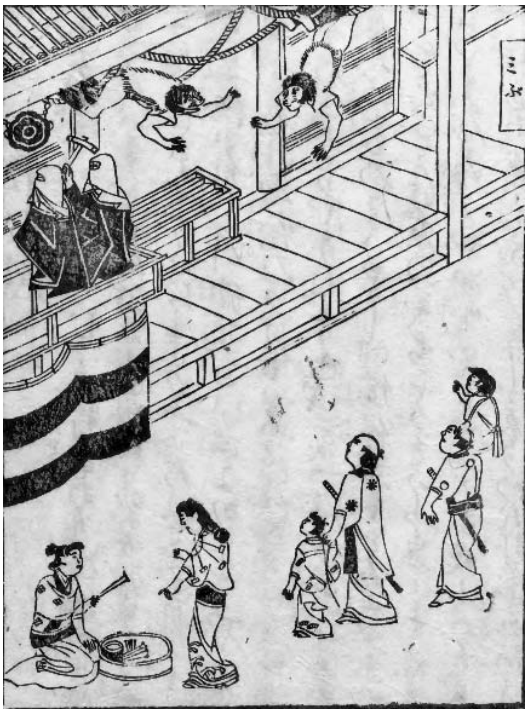

図５　『京童』に描かれる「壬生寺」
出典）国立公文書館デジタルアーカイブ

図６　『京童』に描かれる「千本ゑんま堂」
出典）国立公文書館デジタルアーカイブ

ゑんま堂」の挿絵（図六）においても境内での大念佛狂言の様子が確認でき、当時の宗教系芸能の有り様が覗え、京を代表する春の風物詩であったことが見てとれる。巻三の「上賀茂」（上賀茂神社）も同様に、本文叙述では上賀茂社の縁起に関する事柄に多くを費やし、年中行事である「くらべ馬」には僅かに触れる程度であったが、挿絵では競馬を見物する群衆の様子が図像の主題であり、祭礼／行事に関するものといえる。そして、ここでは『徒然草』の故事が図像（可視）化されており、松浦貞徳の『なぐさみ草』の影響が顕著にみられるという（上杉二〇一五）。このように本文叙述では、精力的に寺社の霊験譚や由緒来歴といった場所の物語を語りつつ、挿絵では祭礼や年中行事の様相を視覚的に表現するものが計十二か所で確認できる。

さらに、例えば、巻四の「吉田」（図七）では、本文叙述において吉田神社の由緒来歴や神楽岡の話題にふれた後に、関連する古歌を二首掲載し、喜雲は「八重と一重花やよし田の早稲晩稲」と詠んでいる。その挿絵では、中央やや上に吉田社の社殿が描かれてはいるものの、本図の主題は手前に描かれる稲を脱穀する作業の様子にあるといえ、喜雲が俳諧に詠んだ吉田の景物の図像化と考えられる。このように挿絵では、（C）「風俗／生業」と分類しえる注目すべき風俗や生業の様子が描写されたものが計九図みられる。ことに嵐山など嵯峨野周辺では、その場所の過去を本文叙述で詳述しつつ、挿絵では風俗や祭礼行事、また庶民の四季の様相を視覚的に表現する図像が多いことに気づく。例えば、「大

図7　『京童』に描かれる「吉田」
出典）国立公文書館デジタルアーカイブ

図8　『京童』に描かれる「大井川」
出典）国立公文書館デジタルアーカイブ

表2　『京童』における内容分類

巻	計	分類	A	B	C	D	E	F
1	18	本文	13	2	1		1	1
		挿絵	13	2	1		2	
2	20	本文	13	4	2			1
		挿絵	8	1	3	4	4	
3	12	本文	11				1	
		挿絵	6		1	4	1	
4	14	本文	9	4			1	
		挿絵	5	1	5	1	2	
5	10	本文	5	3			2	
		挿絵	2	1	5	1	1	
6	13	本文	8	2			2	1
		挿絵	3	1	7	2		

井川」（図八）の挿絵にみえる小鮎漁の描写は、この場所で捕れる鮎や鮎もどきが名産として知られていたことに加え、本文中に示される紀貫之の古歌に対する図像化であると考えられる。

このように、本文叙述では比重が置かれていない風俗や祭礼は、挿絵を用いた視覚的な表現を通じて、喜雲が注目したその場所や景物の様相、そこでみた場所イメージを不特定多数の読者に伝えようとしたと考えられる。これは、本文叙述と挿絵の一種の役割分担といえ、吉田（二〇〇〇）が指摘する「俗」と「雅」の関係性にみる『京童』の特徴を現しているといえよう。

（三）『京童跡追』の場所や景物

『京童跡追』の目録にあげられる場所や景物は、京内外で計六

八か所が確認できる。これらについて『京童』と同様の観点で整理、一覧化にしたものが表三である。これをみると、（A）「寺社／宗教」が計五六か所（全体の約八二％）、次いで、（E）「地理／景観」が計五項目（約七％）、（B）「古跡」が計四項目（約五％）、（F）「その他」が計三項目（約三％）となる。前作とは異なり、巻三の「薪能之事」、巻四の「座間」のように（D）「祭礼／行事」と分類できるものも認められる一方で、各場所での叙述内容の割合でみれば、前作よりも寺社や宗教関連の場所や景物に関する比重が増加し、（C）「風俗／生業」に関するものはみられない。この背景の一つには、同書跋文に「（前略）洛陽のほとり神たち佛たち霊地のよりきたる事凡書よせ。京わらべと題號せし草案を人にほりもとめられ梓に行ひけるに名にたゝる所もあるは繁て省。あるいはおぼつかなくて残せしを。（後略）」（下線部は筆者の加筆）とあるように、前作でとりあげていない京中で著名な霊地の類いを改めて収録し、奈良周辺など他国の著名な霊地をもとりあげたためであるという。

次に、掲載される古歌は、少なくとも計十七か所でみられ、本文中の引用も含めると計四五首を確認できる。これらを分類すると、（A）「寺社／宗教」で十か所（計十七首）、（B）「古跡」では三か所（計六首）、（E）「地理／景観」で三か所（計十七首）、（F）「その他」が一項目（計五首）となる。地域別では、京周辺（巻一、巻二、巻六の三か所）で計七か所、計十首となるほか、奈良周辺（巻三）の計五か所で計十九首、摂津国（巻四、巻五、巻六の三項目）では、計二か所に計十首の古歌を確認できる。なかでも、巻三の「八景」では、南都八景のそれぞれの場所で詠まれた古歌を一首ずつ示すことで場所の説明に代えられている。また、巻五の「三津」では、「近江にも摂津とひとしき此名所あり又歌によみあはせぬるも同物なり」と述べ、山上憶良の古歌など五首をあげ、「一こゝらの名所名所の古歌かぎりなきゆえ是のみあげてやみぬ」として自身の俳句を詠む。ここでも、その場所の説明に代わるものとして古歌を用いているほか、「名所」という表現がみられるなど、喜雲はこれらを歌名所として認識していた可能性が高い。

また、巻二の「春日」では、春日大社の由緒と古歌、そして「春日の御祭」の話題に移る。ここでは、かつてこの祭礼を見物するため奈良に滞在した折の日記「奈良刀」のなかにしたためた俳諧や、宇治見物の折に著した草子「赤手拭」のなかに詠んだ俳諧を貞徳翁が添削したという彼の回想と、この経験から得た俳諧や和歌に対する心得が述べられたのち、祭礼の詳細に移る。「実相寺」では、先師松永貞徳が葬られた当寺を俳諧をたしなむ者は仰ぐべきだといい、喜雲が貞徳の肖像を描いた表補絵の賛を依頼されたことが語られる。ここでも貞徳門下の俳諧師として師への敬意の念と、そこでの彼の位置付けが窺える。このような事例は、奈良周辺が貞徳縁の地であったことのみならず、前作の好評を受けて『京童跡追』を著してていくなかで、あるいは、広島への田舎わたらいで、「広島の喜雲」と称されるように俳諧師とし

表3　『京童跡追』に標題としてあげられる場所や景物の一覧

巻	ID	名称	分類	過去	古歌	現在	挿絵
1	1	仙洞之御池	F				E
	2	清荒神	A	○			A
	3	大炊道場	A	○		○	A
	4	妙傳寺	A	○			A
	5	御所八幡	A	○		○	A
	6	頂妙寺	A	○			A
	7	六角堂	A	○		○	A
	8	粟田口明神	A	○			C
	9	安祥寺	A	○			B
	10	関明神	B	○	○		B
	11	三井寺	A	○			A
	12	智積院	A	○			A
	13	宝塔寺	A	○			A
	14	浄華院	A	○	○		A
2	15	相国寺	A	○			A
	16	建仁寺	A	○			A
	17	鳥部山	E	○	○		E
	18	大谷	A	○			A
	19	立本寺	A	○			A
	20	鹿苑寺	A	○			A
	21	大徳寺	A	○			A
	22	妙心寺	A	○			A
	23	釈迦堂	A			○	A
	24	仁和寺	A	○	○		C
	25	新住吉	A	○	○		A
	26	実相寺	A	○		○	A
	27	妙蓮院	A	○			C
	28	黄檗山	A	○	○		A
	29	元三大師御影	A	○			A
	30	妙泉寺	A	○	○		D
3	31	春日	F	○	○	○	A
	32	薪能之事	D			○	D
	33	八景	E	○	○		E
	34	元興寺	A	○			C
3	35	興福寺　＊2	A	○	○		A
	36	東大寺　＊2	A	○			A
	37	二月堂　＊2	A	○		○	A
	38	西大寺　＊2	A	○			A
	39	法華寺　＊2	A	○	○		A
	40	三輪　＊2	A	○	○		A
	41	長谷寺　＊2	A	○			A
	42	般若寺　＊2	A	○			A
	43	喜光寺　＊2	A	○			B
	44	薬師寺　＊2	A				A
	45	招提寺	A			○	A
4	46	住吉	B	○	○		A
	47	天王寺	A	○			A
	48	庚申縁起	A	○			A
	49	天満天神	F				A
	50	玉造稲荷	A	○			A
5	51	新御霊	B	○			D
	52	座間	D			○	D
	53	生玉	A	○			A
	54	清水	A				A
	55	三津	E	○	○		C
	56	源聖寺	A	○			A
	57	円照寺	A	○			A
	58	尼崎大物若宮	A	○			C
	59	西宮	A	○			B
	60	勝尾寺	A	○			A
	61	大宮寺	A				D
6	62	粟生明光寺	A	○			A
	63	御香宮	A	○			D
	64	興聖寺	E	○		○	C
	65	金龍寺	A	○	○		A
	66	有馬	A	○	○	○	C
	67	白滝前	B	○	○	○	B
	68	厳島	E	○		○	A

て名をあげたことが、強い師弟関係を現す叙述につながった可能性が考えられる。

挿絵について分類すると、（A）「寺社／宗教」が計四六図（約六八％）、（B）「古跡」は計五図（約七％）、（C）「風俗／生業」は計八図（約十二％）、（D）「祭礼／行事」が計六図（約九％）となり、（E）「地理／景観」は計三図（約四％）なる。本文叙述の内容と挿絵で視覚化される内容が異なるものが二〇か所ほど確認でき、本文と挿絵の役割分担が窺える（表四）。描かれる図像の構図的特徴などは、概ね前作を踏襲したものであった。

これらから『京童跡追』では、巻一、巻二は前作にはない京周辺の寺社や「霊地」など宗教的な色合いの強い場所を中心に構成されている。そして、巻

三にみられる奈良周辺部では、喜雲の奈良滞在中の日記『奈良刀』の記述や、場所場所で詠んだ俳諧を一つの基盤に置き、田舎わたらい以降の俳諧師としての彼の立場やそのまなざしに基づいて蓄積された名所や過去の物語をめぐる彼の「知」を反映させながら構成したことが窺える。巻四、巻五に収録される大坂を中心とする摂津国内や巻六の厳島についても、奈良の事例と同様に過去の物見遊山や、あるいは広島と京の往復の途中での見分したもの、広島での滞在中の知見といった場所をめぐる「知」をもとに、それぞれの地域での見どころを本文叙述と挿絵を用いた可視化の実践であったと考えられよう。

このように『京童跡追』では、京周辺の補遺に加え、京以外の地域（奈良周辺、摂津国、厳島）の場所や景物をとりあげるなど、掲載する地域的スケールが大幅に拡大している。それらの叙述内容をみると、引用や言及する旧記名が明記されるなど、前作とでは叙述方法の変化も確認できる。これは、『京童』の刊行直後に続編の編纂準備を始めたとしても、刊行に至るまで約十年が経過したことで喜雲の立場も向上し、彼の見出した場所や景物に対して、その案内は京童に仮託した前作の設定から、著者自らが案内するような設定に変更されたとも推測できよう。

表４　『京童跡追』にみる内容分析

巻	計	区分	A	B	C	D	E	F
1	14	本文	12	1				1
		挿絵	10	2	1		1	
2	16	本文	15				1	
		挿絵	12		2	1	1	
3	15	本文	12			1	1	1
		挿絵	11	1	1	1	1	
4	5	本文	3	1				1
		挿絵	5					
5	11	本文	8	1		1	1	
		挿絵	5	1	2	3		
6	7	本文	4	1			2	
		挿絵	3	1	2	1		

Ⅴ．喜雲の「名所」をめぐるまなざしと編纂姿勢

『京童』および『京童跡追』にみられる場所や景物の特徴は上述のように整理できる。本章では、前章で示した五つめの分析視点について、これまでに得られた知見から考察する。

まず、当該時期の社会的・文化的背景に着目しながら、喜雲の場所認識と編纂姿勢について検討してみたい。彼が実に多くとりあげている場所は、著名な寺社や霊地、宗教者の事跡に関する事柄であった。これは、京では大規模かつ壮麗な著名な寺社が集中し、当該時期において既に拝観料を徴収して一般公開する寺社がみられたほか、幕府の寺社政策の一環としての十七世紀の寺社再建の建築ブームなどを背景に整備されつつあった宗教都市としての京の性格を現している（京都市一九七二）。このような編纂実践と読者の需要に関する社会・地域的文脈には、室町期以降、経

済発展を背景とした町衆の非日常性（世俗的自我からの開放）の希求を背景とする寺社への信仰や参詣行為、余暇を利用した能や歌舞伎などの鑑賞や物見遊山といった行動文化が存在するという（川嶋一九九九）。また、東山・西山（嵯峨野）の地域といった著名な遊楽地や社門前における喫茶や酒宴の様子が寺社の挿絵を用いた視覚的な表現も、当時盛んに制作された都市風俗図中に描かれる構図、描写内容と類似するものであった。これらは、寺社参詣や遊楽という非日常生活や空間の中で、喫茶や酒宴がハレのものとして人々に位置付けられていたことに由来するものと推測できる（村井二〇〇二）。例えば、『京童跡追』巻二の「鹿苑寺」には、かつて友と参詣した折の回想がみられるように、喜雲自身も医師や俳諧師として多くの町衆とともに非日常性を希求し、日常の活動の中での和歌や俳諧など諸行動を実践していた一人であったのであろう。

また、彼は古跡に対して熱心に場所の過去を探求し、旧記の照会や自己の見解も示している。先述した「嵐山」のように、現在の自己の置かれた境遇に感傷したり、『京童跡追』での奈良の事例のように、松永貞徳との強い関係性を示すなど喜雲自身の話題におよぶこともあった。これに加え、『源氏物語』、『伊勢物語』などの文学や古代中国の医学書など様々な旧記の引用や言及がみられるなど、医師や俳諧師としての正統性、自己の教養の源泉を主張するような場面も散見できる。さらに、伝統的な和歌書にみられる古歌を示すことで、歌名所を「名所」として再生産している。このように自身の高い教養や立場の主張を盛り込んだ名所記編纂の実践は、喜雲と同時代に寛永ネットワークのなかにいた若い漢学者であった山本泰順の『洛陽名所集』にも随所に見られる特徴である（安田一九七六）。喜雲の場合、泰順ほど強烈ではないにしろ、自身の教養や正統性を名所記を通じて世の中に知らしめ、士官を目指すという編纂動機は重なるものがある。このような思考的背景をもち、彼の実地見聞における場所の物語や民俗誌の発見、それに対する旧記との照会などの歴史地理的なまざしとその実践により、本文叙述では、ある程度の実用性を持つ地誌的性格を担保する。そして、挿絵による景物の視覚化との役割分担を通じて、京の雅と俗を語る通俗的な読物として、教養と知識、俳諧という彼の文芸によって、しばしば本筋を逸脱する遊び心をもちつつ、不特定多数の読者を意識して発表したのが『京童』であり、続編である『京童跡追』であったといえよう。

さて、喜雲は後世においてその濫觴と位置付けられる「名所」を（に）案内することを趣旨とする名所案内記として『京童』を著述したのだろうか。『京童』刊行から四半世紀ほど後、黒川道祐は『雍州府志』の「古跡門」で古歌が詠まれた場所が「名所」であり、その他は「注目すべき古跡」であると定義している（拙稿二〇〇九）。また、同時代の『攝陽郡談』なども、「歌名所」と「俗名所」は区別されているという（上杉二〇〇四）。しかし、喜雲は『京童』編纂にあたって、自身がとりあげる「名所」とは何かを定義しているわけではない。本文の叙述で「名所」という語

が用いられる場所は、真葛ヶ原（「円山」）、音羽（「清水寺」）、「宇治」、「小倉山」、広沢池（「釈迦堂」）など極めて限定的なものであり、『跡追』でも、松ヶ崎（「妙泉寺」）、摂津国の「三津」など、「名所」の使用は限定的であった。この他にも、本文において古歌を叙述の代わりに用いる場所も歌名所の可能性が高いことは先述の通りである。これらは、紅葉や観月など季節を重視する場所で古歌が多く示される傾向があり、古くから歌が詠まれた歌名所の系譜として、あるいは室町期以降、連歌や俳諧の題材となるなど、既に成立しつつあった町衆が実際に訪れる対象としての花や四季をめぐる景勝地と考えられる（川嶋一九九九）。つまり、喜雲が「名所」、もしくはそれに準じるカテゴリーでとりあげる場所や景物は、中世以来の「歌名所」の系譜をもつものであったといえよう。

当該時期において、物見遊山の対象としての観光名所化が徐々にみられていた寺社や古跡の存在は、歌名所とその他の俗名所を明確に区分することは、複眼的なまなざしが向けられていることから難しいが、『京童』でとりあげられる場所や景物に関して、喜雲が「名所」と位置付けるものはごく僅かにすぎず、本書序文にあるように、京での物見遊山において歌名所をも含み込んで、当該時期において注目すべき見どころやそこでの民俗誌を識した総合案内であり、第一義的には他者への咄のネタを意図した草子（物語本）であったといえる。そのため、旅や物見遊山といった庶民の行動文化の興隆や、家や地域の「過去」をめぐる歴史地理的なまなざしの社会的拡大を背景とする、十八世紀以降にみられる様々な場所や景物が「名所」として認識され、場所イメージの再生産がおこなわれていくような種々様々な名所を一同に集め、一般読者に名所を案内する実用的な「名所案内記」として喜雲が本書を意識した可能性は低いといえよう。

『京童』の刊行部数やどの程度一般読者に流通したのかは史料的制約から不明であるが、少なくとも四つの改板がみられるほか、『京童跡追』の叙述にみられるように喜雲は本書に手応えを感じていたし、田舎わたらい後にも続編の刊行を書肆に進められるなど、本書に対する社会的な認知とその需要は長らく維持されたものと推測できる。この後、近世を通じて編纂される名所地誌本において、本書が名所案内記の「旧記」として認識されるようになり、場所や景物の解説のなかで知的典拠として引用がみられるなど強い影響力を残している（拙稿二〇〇九、二〇一二）。後世における名所地誌本編纂の実践の中で、喜雲の意図を越えたところで『京童』が近世初期を代表する名所記、名所案内記として社会的に位置付けられていった可能性が考えられる。また、近代以降も、例えば高木（一九二七）は、近世名所地誌本の傾向とその特徴を概述するなかで、『京童』をとりあげ「版本にて公刊された最初の京都地誌」であるとし、「寛永頃流行したる物語本が仏性を帯びた名所記となりつゝある時の作である」と評価している。同様の評価は鶴見（一九四〇）らの言説にもみられるものであり、『京都叢書』などに収録されていく過程の中で『京童』の

特徴や価値が検証され、京都における名所案内記の嚆矢として位置付がなされ、現在に至るまで記念碑的な名所地誌本としてアカデミックな価値の再生産がなされてきたと考えられよう。

Ⅵ．まとめにかえて

本稿は、近世初期上方において形成されつつあった名所観を検討するにあたり、当該時期の京で成立した最初期の名所記とみなされる中川喜雲の『京童』、続編の『京童跡追』を分析対象として、作中にみられる特徴を検討してきた。さらに、そこからみえてくる彼の場所認識と著述の実践について検討してきた。

これらから見えてくる『京童』の特徴は以下のようにまとめられる。本文叙述をみれば、まず、当時の京で整備されつつあった宗教都市としての京の様相や、非日常性を希求する町衆の行動心理といった社会的背景とした著名な寺社や霊地など宗教的な事柄を持つ場所が多くみられる。そして、実地見聞や旧記の照会をおこないながら、古跡を熱心に探求する歴史地理的なまなざしの実践と、自己の教養の高さや医師／俳諧師としての立場が示されるなど、世に名をあげるという意識もうかがえるものであった。また、四季をめぐる町衆の名所観の形成過程とその知識の需要を一つの社会的背景に、医者や俳諧師としての振る舞いに必要な教養であった古歌をめぐる知識に基づく「歌名所」の重要視がみてとれる。これらは、鶴見（一九四〇）が指摘したように、過去に対して熱心に探求した過去の可視化の実践といえ、場所をめぐるまなざしは極めて人文的な捉え方であった。これは、野村（二〇一一）が指摘するように、柳田国男が近代日本における新しい名所観を構築するにあたり、近世的なものとして否定する場所へのまなざしの特徴とほぼ一致し、近世名所地誌本黎明期には既にみられていることを物語っており大変興味深い。

次いで、挿絵による場所イメージの視覚化の実践に目を転じれば、その場所で発見した過去や、古歌に詠まれる景物の可視化もさることながら、その場所でおこなわれる祭礼や風俗など民俗的なものへの注目や、現在の様相が描写されるように、視覚化された場所イメージの生産がなされている。このように『京童』とは、本文叙述と挿絵による景物の視覚化との役割分担を通じて、京の雅と俗を語る通俗的な読物として、教養と知識、俳諧という彼の文芸によって、しばしば本筋を逸脱する遊び心をもちつつ、京での物見遊山において歌名所をも含み込んで、当該時期において注目すべき見どころやそこでの民俗誌をも識した総合案内であり、第一義的には他者への咄のネタを意図した草子（物語本）であったと結論づけられる。

喜雲にとっての名所をめぐる場所認識とは、あくまでも歌名所の系譜を持つ場所や、詠まれた景物に比重が置かれているのであり、本書を通じて示される著名な寺社や古跡、四季折々の京を代表する風物詩や民俗的な様相など、当該時期の京イメージを形成

するような事象については、あくまでも注目すべき「見どころ」とでもいえる、名所とは異なる場所認識であったように思われる。これは、山本泰順や黒川道祐の場所認識とも類似するものであり、彼らが注目すべきものとして見出した場所の多くは、十九世紀初頭の段階では、「名所」として地誌本にとりあげられるようになる。また、旅日記など当時の資料からも明確に「名所」あるいは「名勝」として知識人層のみならず、一般大衆にまで定着するに至り、その場所は多く人々で賑わう観光地化していく（青柳一九九四）。洛中洛外の種々の名所や民俗的な事柄を構成要素とした「京らしさ」という都市表象や、「京」に対するホームとしてのアイディンティが形成されるのが十八世紀以降であったという鎌田（二〇〇五）の指摘を考えれば、その前段階といえる十七世紀中頃の時点では、一般庶民が訪れる対象としての「俗名所」や、現在の様相に場所や風景の価値を見出す「現在名所」のような、その後に多様化する名所をめぐる場所認識の兆候はみられだすも、はっきりと意識されるには至っていなかったのであろう。

名所地誌本編纂黎明期の名所観の解明には、例えば同時期に『洛陽名所集』を編纂した山本泰順や、『京雀』を編纂した浅井了意の場所認識を考察し、比較検討する必要があろう。また、十七世紀の名所観の解明にあたっては、京・大坂・江戸の三都論で議論する必要がある。さらには、拙稿（二〇二〇）に示したように、挿絵がある名所地誌本を視覚資料としてとらえ、分析するに当たっては、例えば Rose. G.（二〇一六）に代表されるような、視覚資料に対する欧米圏の人文地理学の研究動向や、岸（二〇〇八）による絵画と視聴者の関係性といった「絵画行為論」の視点への目配せも重要であるが、本稿ではほとんど対応することが出来ていない。これらの点を今後の課題としたい。

キーワード：中川喜雲、『京童』、名所、場所認識、視覚資料

［附記］

本稿は、平成二五年（二〇一三）三月に、神戸大学人文学研究科に提出した博士論文『近世・近代の京都および周辺都市における名所観の成立と変容』の第三章前半部分を大幅に加筆修正したものである。なお、本稿は、平成三一年度文部科学省科学研究費基盤研究C（課題番号：19K01193）「視覚資料の空間表現に関わる歴史地理学と東洋美術史の学際研究」（研究代表：長谷川奨悟）の成果の一部である。

〈注〉

（1）野間光辰監修『新修　京都叢書　第一巻』臨川書店、一九六七。

（2）喜雲自身も、『京童』の反響を受けて、初版が刊行されて間もなく続編の準備を進めていたことが、後年の『京童跡追』の序文に示されている。

（3）『江戸文学』四二は、「近世の書籍をめぐる版権と報酬―近世から近代へ―」という特集が組まれ十一本の論考が掲載された。ここでは、近世おける書籍出版とその版権問題に関する検討の中で、書肆が新たに名所地誌本を刊行する際には、同類と見なされる既存の版木を求版し、その書籍に関する権利の収得を行っていることが詳らかにされている。

（4）近世初期の『雍州府志』において、名所とはナドコロを指すと定義されているほか、十九世紀の『江戸名所図会』でもなお、名所には古歌が詠

まれていなければ名所として成立しえないという建前が確認できる。

（5）「因能歌枕」には、「国々の所々名」という項目があり、山城を初めとする六二ヶ国の地名、六六六ヶ所があげられている。

（6）「一には名所をとる故実あり。国々の歌枕かずもしらずおほかど、その歌のすがたにしたがひてよむべき所のある也」と述べられている。

（7）市古（一九七九）は、喜雲の医学の師を、儒医であった徳昌庵法眼慶雲であったとし、喜雲の号も慶雲より命名された医者としてものであったと推測している。

（8）黒川道祐は『雍州府志』を編纂するにあたって、交流のあった近衛尚嗣が所有していた近衛家の旧記を、叙述の典拠として利用した痕跡がある。

（9）『京童』の初版は、これまでの通説では、①山森版が初版であるとされてきたが、近年の藤原（二〇一三）の調査によって、②八文字屋五兵衛版が初版であることが確認されている。

（10）本書の初版は、京の書肆安田十兵衛であるとされてきたが、書末尾の書肆名部分の区画の乱れなどから、市古は当初は別の書肆によるものが、安田へと版が移行した可能性が指摘されている。

（11）『京童』序文部分に、石清水に参詣した仁和寺の法師の失敗談（『徒然草』第五十二段）を思い出して、一人の少年を案内者として諸処を巡覧し、その乞うままに本書を書き記して興じたとその趣向が示されている。

（12）例えば、黒川道祐『雍州府志』の「古蹟門」では、山城国内を立項される項目の集中具合から、いくつかの地域に別けることができるが、この地域間では、その記述内容や、取りあげられる場所や景物の時代性などに違いがあることから、各地域へのまなざしと、「古跡観」とでもいうべき場所感覚に違いがあったものと推測できる。

〈参考文献〉

青柳周一二〇〇二『富嶽旅百景―観光地域史の試み―』角川書店。
赤井達郎一九九四「京名所の絵―『京童』から『京都百景』へ―」（中川邦昭『都百景』京都新聞社）八―十六頁。
市古夏生一九七六「解説」（横山重監修『近世文学資料類従一』勉誠社）
市古夏生一九七九「中川喜雲覚書」甲南女子大学研究紀要十六、一一一―一三一頁。
市古夏生一九九三「山本泰順と中川喜雲」国語と国文学七〇、八〇―九〇頁。
市古夏生二〇一〇「江戸から明治に至る版権と報酬の問題」江戸文学四二、四―十九頁。
上杉和央二〇〇四「十七世紀の名所案内記に見える大坂の名所観」地理学評論七七―九、五八九―六〇九頁。
上杉和央二〇〇九「過去の世界をめぐる認識・知識・想像力」（竹中克行・大城直樹・梶田真・山村亜希編『人文地理学』ミネルヴァ書房）一九九―二一三頁。
大高篤史・古田雅憲二〇〇三「『京童』挿絵小考（二）―「被り物」図像の機能について―」語学と文学三九、二三―四〇頁。
鎌田道隆二〇〇〇『近世京都の都市と民衆』思文閣出版。
鎌田道隆二〇〇五「近世的都市観の生成―京都・大坂―」大阪照合大学商業史博物館紀要六、二三―三五頁。
神谷勝広一九九九『近世文学と和書類書』若草書房。
川嶋将生一九九九『「洛中洛外」の社会史』思文閣出版。
神崎宣武二〇〇四『江戸の旅文化』岩波書店。
岸文和二〇〇八『絵画行為論―浮世絵のプラグマティックス―』醍醐書房。
京都市編一九七二『京都の歴史五　近世の展開』学芸書林。
北住敏夫一九七一『古代和歌の諸相』明治書院。
群馬県立歴史博物館・米沢市立上杉博物館・林原美術館編二〇一一『洛中洛外図屏風に描かれた世界』プロジェクトチーム。
米家泰作二〇〇五「歴史と場所―過去認識の歴史地理学―」史林八八―一、一二六―一五八頁。

佐々木忠慧一九七九『歌枕の世界』桜楓社。
菅井聡子一九九九「江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間―類型化と編纂史の分析を通じて―」地域と環境二、二九―三九頁。
鈴木章生二〇〇一『江戸の名所と都市文化』吉川弘文館。
高木利太一九二七『家蔵日本地誌目録』甲麗荘。
高橋良雄一九六六「歌枕研究序説」學苑三一三、七八―八八頁。
千葉正樹二〇〇七『江戸名所図会の世界』吉川弘文館。
鶴見誠一九四〇「名所記概説―名所観に及んで―」古典研究五―六、五一―六二頁。
中村利則二〇〇二「町人の文化―名所と町並み―」（京都造形芸術大学編『京都学への招待』角川書店）一三五―一四六頁。
野間光辰一九六七「解題」（野間光辰監修『新修　京都叢書　第一巻』臨川書店）一―四頁。
野村典彦二〇一一『鉄道と旅する身体の近代―民謡・伝説からディスカバージャパンへ―』青弓社。
長谷川奨悟二〇〇九「『雍州府志』にみる黒川道祐の古跡観」歴史地理学五一―三、二五―四三頁。
長谷川奨悟二〇一〇「『都名所図会』にみる十八世紀京都の名所空間とその表象」人文地理六二―四、六〇―七七頁。
長谷川奨悟二〇一二「近世上方における名所と風景―秋里籬島『都名所図会』『摂津名所図会』を中心に―」人文地理六四―一、十九―四〇頁。
長谷川奨悟二〇一八「都市伝説と『名所図会』」（都市史学会編『日本都市史・建築史辞典』丸善出版）五六四―五六五頁。
長谷川奨悟二〇一九「名所図会資料に対する歴史ＧＩＳ分析」（平井松午編『近世城下絵図の景観分析・ＧＩＳ分析』古今書院）一二五―一四九頁。
長谷川奨悟・網島聖二〇一九「視覚イメージからみた佛大本洛中洛外図屏風」佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要一五、二七―四六頁。
長谷川奨悟「阿部美香著『歌川広重の声を聴く―風景への眼差しと願い―』」史林一〇二―六が近日刊行予定。
原淳一郎二〇一三『江戸の旅と出版文化』三弥井書店。
平澤毅二〇〇〇「『廻国雑記』にみる名所・風景の記述」ランドスケープ研究六三―五、三六七―三七〇頁。
藤川玲満二〇一〇「名所図会をめぐる書肆の動向―小川多左右衛門と河内屋太助―」江戸文学四二、三八―四九頁。
古田雅憲二〇〇〇「『京童』挿絵小考（その一）―巻一「誓願寺」と「和泉式部」―」文教国文学四三、一―十四頁
馬淵美帆二〇一一『絵を用い、絵を創る』ブリュッケ。
村井康彦（二〇〇二）『日本の文化』岩波ジュニア新書。
安田富喜子一九七六「山本泰順考―或る名所記作家としての生涯―」橘女子大学研究紀要四、二八―四〇頁。
山近博義一九九九「近世名所案内記の特性に関わる覚書―「京都もの」を中心に―」地理学報三四、九五―一〇六頁。
Rose. G. *“Visual Methodologies : an introduction to researching with visual materials“ 4th edition.* Sage. 2016